

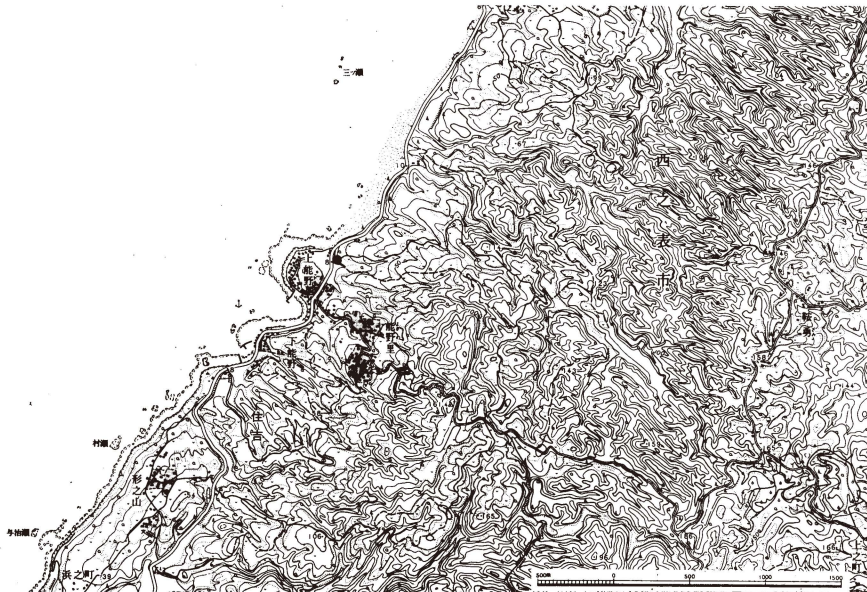
# 上能野貝塚発掘概報

河 口 貞 徳

## 1 遺跡の環境

上能野貝塚は鹿児島県西之表市住吉上能野にある。西之表市役所から直線距離にして5.85km南方の西海岸に位置している。大町川が下刻してつくった谷は沖積平野となって現在は水田となり、その南側には能野集落が成立し、北側はなだらかな丘陵となって海にのぞみ、表面は

## 第1図 上能野貝塚付近図



●上能野貝塚

林地と畑地で覆われている。これは本来最下位の海岸段丘面であって、その末端部は県道上中線によって切断されている。遺跡は県道をはさんで上下に形成されたものであるが、県道より海岸側は20年ほど前に削平されて宅地となり、現在は遺構をとどめていない。県道より山手の部分は砂丘となり、大町川の支流と県道との交叉点を起点として、北東へ50m四方の地域が遺跡となっている。

遺跡地は標高17mで、西南方へ傾斜し、大町川につくった低地へ急崖をなして望んでいる。中央部は市道で切断され、その両側にそれぞれ貝塚の存在が認められた。貝層面はいずれも標高14.7mで一致していることからみても、両側の貝塚はもともと続いていたもので、出土する土器もこのことを裏づけている。

種子島は中種子町の地峡部を除きほとんど岩礁性の海岸で囲まれ、その岩盤上に砂丘の堆積が行なわれているのが常である。上能野貝塚もこの例にもれず、頁岩とみられる熊毛層が基盤となり、その上に砂丘の堆積がみられ、貝層は砂丘の間層となっている。したがって上能野貝塚形成の時期は砂丘堆積の途中ということになる。

貝塚周辺には埋葬が行なわれていたことが、これまでに行なわれた宅地造成、県道、市道の工事などによって判明している。貝塚の西側の、県道、海岸道路と大町川によって囲まれた三角地は、現在は県道路面より少々低くなっているが、20年程前に宅地造成が行なわれるまでは、遺跡地の丘陵の延長で現在より<sup>(1)</sup>5m程高く、松林であったという。この地域は北より蔵元吉川、浜添、畑山の4軒の住宅となっており、吉川家の西側には砂糖小屋があった。宅地化工事のおりに畑山氏（当時は横山氏）の宅地からは貝輪をはめた人骨、浜添氏宅地からは人骨3体以上、畑山、浜添氏の中間の畑地からは人骨1体以上、海岸側砂糖小屋からも1体以上が発見されている。約3年前に行なわれた県道拡幅補装工事では、浜添氏宅地の向側対蹠点に当る県道沿いの地点で、地表下約1.5mの深さから人骨1体、市道分岐点付近から2体以上、貝塚東側の砂糖小屋付近から1体以上の人骨が発見され、<sup>(2)</sup>総12体以上の埋葬が貝塚の周辺部で行なわれていたことが明かである。

以上に述べた事項によってみると本遺跡は、貝塚を中心として周辺に埋葬址を有するもので生活地域とこれを囲むような形の埋葬地域から形成された特色ある遺跡であることがわかる。

貝塚から海岸までの距離は約130m、眼下に東支那海を望む景勝の地であり、南には大町川の沖積低地をひかえ、低地の向側の丘陵には能野焼の窯址もあって、立地条件はきわめて良好で、弥生時代の居住地としては典型的な環境にある。ただ前面の低湿地が狭小で充分の農耕生産をあげることができなかったものと思われる。これがこの時期には少ない貝塚形成の一因であろう。

## 2 調査経過

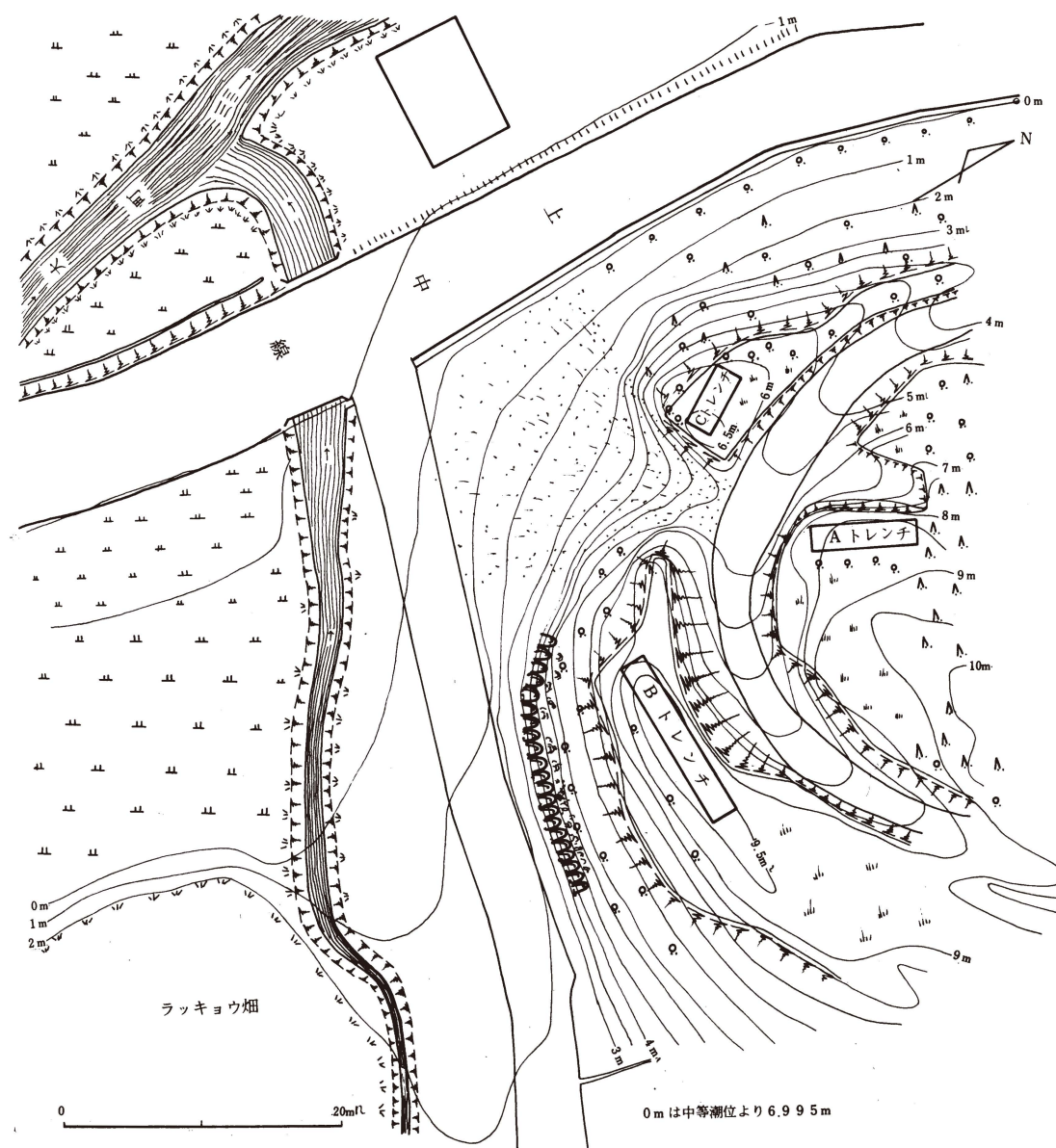
本遺跡の発見は昭和45年10月の集中豪雨による遺跡地の一部崩壊の結果であった。この崖くずれによって貝層が露出し、土器、獣骨、石器類が地表に流出した。西之表市教育委員会は県社会教育課と連絡をとりその処置について検討し、その間県社会教育課の盛園文化係長の現地視察があり、筆者も昭和46年2月葦永、鳥ノ峯遺跡の調査のついでに現地を見学した。西之表市教育委員会は遺跡の重要性を認めて発掘調査を実施することを決定した。

調査は昭和47年3月24日より同月30日まで7日間実施した。次に調査担当者あげる。

### ◎調査員

鹿児島県文化財専門委員	河 口 貞 徳
ラ・サール高校教諭	上 村 俊 雄
鹿児島大学学生	本 田 道 輝
立正大学学生	長 野 真 一

## 第2図 上能野貝塚地形図





種子島実業高等学校教諭並びに学生十数名

人夫数名

なお、発掘の実施にあたって、準備、設営など諸般の事務に万全を尽された教育委員会担当の方々の氏名を記して感謝の意を表したい。

西之表市社会教育課長 今別府 望

同 主事 土屋 辰夫

同 田上 利男

西之表市立博物館主事 鮫島 安豊

終りに付記しておきたいことは、この遺跡が45年に発見される前に何回かの遺物の事実上の発見があったことである。ことに残念なのは重要な埋葬遺跡であり、従来発見の埋葬遺跡が東岸のみにかざられている中で、只一つの西岸の埋葬例であり、しかも埋葬法に東岸と異なる点もあったらしいことなどもあって、埋葬の遺構と共に遺体も滅失したことはおしきりである。然し現存遺跡の中に埋葬遺構も残存しているものと推定されるのでこれについての処置に万全を期したいものである。

### 3 遺 跡

遺跡地は県道上中線と、大町川の支流に沿って分岐した市道に西と南を限られた地域であることは前述したが、更に遺跡の中央を孤状の市道が凸面を南に向けてよぎっておりこれと交叉するように、45年の豪雨による侵食溝が西南方向に流下していて、貝塚は三分された形となっている。発掘はこの三地点について行なった。孤状市道北側の雨裂に沿って略南北方向に幅2m、長さ7.6mのAトレンチを設け南より2m毎に区画してⅠ区～Ⅳ区(Ⅳ区は1.6m)とし、孤状市道南側、東よりの地点に東西方向に幅2m、長さ13mのBトレンチを設け、2m毎に区画して、東よりⅠ区～Ⅶ区(Ⅶ区は1m)とし、孤状市道南側、西よりの地点に、西北—東南方向に幅2m、長さ4.8mのCトレンチを設け、2m毎に区画し、東よりⅠ区～Ⅲ区(Ⅲ区は0.8m)とした。

A、Bトレンチの地点は松をまじえた灌木で覆われていたため、最初樹木の伐採を行ない樹根を除去する作業にしたがったが、意外に根は浅く、縦根がなかったために作業がはかどった。A、Cトレンチは上村俊雄、Bトレンチは本田道輝が担当し、河口が総括した。

#### Aトレンチ

Aトレンチの設定地点は、地形は東より南へ傾斜しているが、貝層は略水平に堆積し、地表からの深さは約80cmである。層序を次にあげる。

Ⅰ層(表層)、20cm、黒褐色層、樹根多し。

Ⅱ層 60cm、白色砂層、無遺物層

Ⅲ層 40～30cm、貝層、遺物包含層

Ⅳ層 黄色砂層、無遺物層



### V層 熊毛層, 頁岩

遺物包含層のⅢ層は小形の巻貝が多く、現在普通に沿岸で採取される種類である。貝その他の自然遺物についてはⅣ区東側断面南より30cm四方の柱状採取を行ない、平山武章氏の同定を依頼する予定であるので結果を待って報告したい。

遺物には甕形土器の破片の他、自然礫がみられ使用痕のあるものもみられた。自然遺物では捕食したと思われるイノシシ、シカ、ウミガメ、岩礁性の魚族の骨などが発見された。

### 地層模形資料

市立博物館に陳列する資料として、Aトレンチ西側に雨裂によって生じた美事な貝層断面を利用することとし、貝層露出面南端より4m～5mの間の1m幅を、厚さ30cmに切り取り、この資料を実物大に陳列用ケースに復元する予定で、復元には博物館主事鮫島氏が当ることになっている。

### Bトレンチ

Bトレンチの設定地点は北側と南側を市道にかぎられ、西側は雨裂に、東側は低地に囲まれ孤立した細長い丘陵状を呈している。基盤の熊毛層の上に厚く堆積した砂層中に、貝層が堆積したものである。層序はAトレンチと同様であるが、貝層に達するまでの砂層が厚く、トレンチ西端のⅦ区では貝層表面までの深さ1.75m、東端のⅠ区では約2.2mで貝層表面は西から東へ傾斜していたことが判明している。貝層の厚さは30～40cmであるが、ところによっては貝の包含が少なく、Aトレンチに比較して、自然遺物は概して少ないが、人工遺物は反対に多い点に注意をひいた。

遺物包含層である貝層に至るまでの砂層が厚いために、発掘中にトレンチの壁が崩壊しトレンチ幅の発掘が不能となったので、中央部の50cmほどの幅を発掘した。このトレンチからは鉄製釣針をはじめ、鉄器の柄部、貝製の有孔円盤、丹冊状の符、局部磨製石斧叩石など土器以外にも重要な遺物が出土した。

発掘の途中にしばしば壁の崩壊があって作業の進行をさまたげられ、前記のように貴重な遺物を出土する地点であったにもかかわらず充分の発掘ができなかったのは残念である。

方法を改めてこの地点を全面発掘を行なったならば、驚くべき資料が発見され、刮目すべき結果が得られることと思う。

### Cトレンチ

CトレンチはBトレンチの北西、県道よりの孤立丘陵状の地点に設定した。トレンチ南端部のⅠ区にわずかに貝層が認められたが、地層が攪乱され遺物の出土量もきわめて少ないが、現代の陶器片1個の他はすべてA、Bトレンチと同一型式の土器片が発見されている。注目すべき出土品として貝輪1個があった。

## 4 遺 物

遺物についての記述をするに当たって、ことわっておきたいことは、今回発掘した遺物が手も

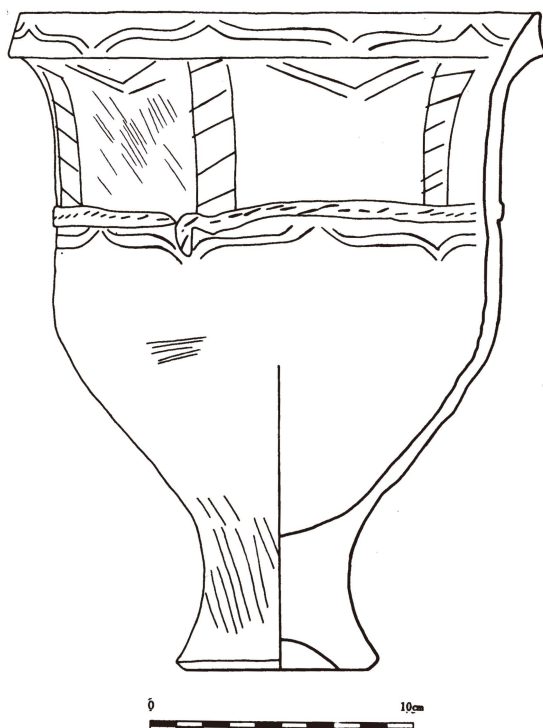
とにないまま、発掘日誌、写真などを資料として記述しなければならなかったことである。したがって詳細は後にゆずって、1, 2の遺物について概略を述べる。

### 土器

本遺跡出土の土器はすべて1型式に属し、発掘されたものは甕形土器だけであった。ここではBトレンチ附近より畑山稔君(当時住吉中3年生)等によって掘り出された甕形土器(第3図、図2右上の土器)について述べる。この土器は中形の釣鐘形で、充実した脚台をもっている。底部中心部がわずかに凹み、あげ底風になっているのが特徴である。胎土は砂粒を多く含み焼成は良好で、器壁は薄く4~6mm程度である。色調は表面紅褐色で、頸部には浅い刷毛目を斜行させ、下胴部には条痕様の横走る筋がみられる。又脚部は縦位の篋跡がみられ擦痕をのこしている。内面も紅褐色を呈し口縁部附近は横の刷毛目がみられるが、屈曲部分以下にはみられず、下胴部以下は外面に付着した炭素と呼応するように煮沸による爛れをみせている。輪つぎによって作成されたことが、土器外面の凹凸によって明かである。

文様はするどい篋によって胴部以上に描かれ、直線と曲線を組み合わせた特色のあるもので、2並行線を基本文様として、山形又はその変形で構成され、間に2並行線間を斜線で充めたものである。口縁部外面と頸部には粘土紐をめぐらし、口縁部は肥厚して断面は三角形を呈する。

第3図 上能野貝塚出土甕形土器



頸部の凸帯は幅が狭く、薄くひらべったいものであるが、縄を表現した刻目と、結び目垂れ下りがある。一見弥生式土器にみられない特色をもっているが、器形や、文様をよく検討すると弥生式土器の要素に至るところに有し、まちがいない弥生式土器であることを示している。この型式の編年上の位置は中種子郷土誌によると後期とされ<sup>(3)</sup>ている。理由としては、「この土器にともな<sup>(4)</sup>って土師器・須恵器もみられることから、終末期は明らかに弥生の下限を越えてまで相当な年代的な幅をもっていたことがわかる。」として共伴遺物を編年のよりどころとしている。しかしその後の記述には「この時期の包含層は種子島でさえ明瞭なもの<sup>(5)</sup>は見出されていない。」と述べて既発見の遺跡が保存状態が悪く、攪乱層であったことを示している。したがって前述の土師・須恵との共伴とあるのは信憑性がなく編年のよりどころとはならない。現に上能野貝

塚の土器は単一型式に限られ、土師、須恵の伴出は全然認められない。

種子島の弥生時代の土器文化は、前期から中期初頭までは、北九州系の文化が西海岸づたいに南九州を経て流入しているものと思われるが、その後種子島独自の文化を形成している。鳥ノ峯出土の甕形土器は頸部に幅の広い凸帯をめぐらし、三条の沈線を施し、凸帯下に重孤文を篋描きしたものがある。北九州より九州西海岸地方に分布する弥生前期の壺形土器の文様から転化したものと思われる。器形は充実したあげ底風の脚台を有する甕形土器で、弥生時代前期末から中期にかけて、城ノ越、亀ノ甲、境目西原、入来などの諸遺跡で見られる甕形土器の脚台の系統を引くものである。種子島ではこの器形が後まで継承されている。文様器形など種々の要素を混入している点から、時期的にはかなり下るものと見られる。

この鳥ノ峯の甕形土器の口縁部に粘土紐をめぐらして肥厚させ、頸部の凸帯が狭く、ひらべったくなったのが上能野の甕形土器である。文様は細刻線の組み合わせだったもので、複雑多様化して、九州中南部にみられる重孤文土器の発生と規を一にするものである。弥生後期に属するものと見られる。この土器には同一器形の素文土器があり、両者を合せて一型式とみるべきで他に壺形土器などもあるものとみられる。上能野貝塚出土の土器を標式として上能野式と呼ぶことにしたい。

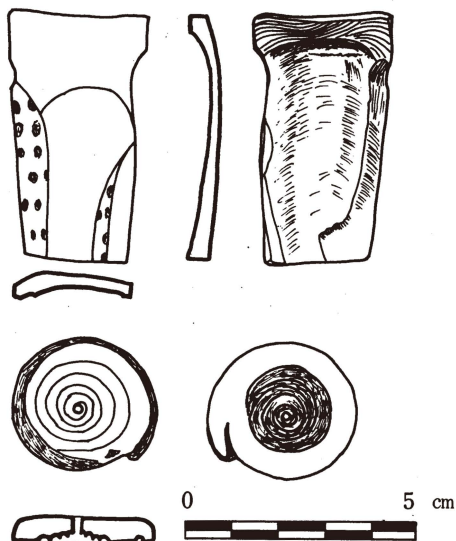
## 石 器

半磨製の石斧2個、叩石数個などが出土している。この時期には一般に石斧は消滅して鉄器に代っているのであるが、ここでは残存していることは、新しい発見例といえる。

## 貝 製 品

貝輪、貝符、鍾飾などが出土している。第4図上図版1右下の貝符はBトレンチV区3層出土のもので、長さ5.5cm、幅3cm、一端に近くえぐり状のけずり込みがみられる。だいまいよういもがいを裁断加工したものである。他に加工途中のものもみられた。

## 第4図 貝符と貝垂飾



第4図下(図版2左下)の鍾飾、中央に穿孔してあるので鍾飾としたが、紐づれの痕跡は認められない。長径3.2cm、厚さ5mm、いもがいの殻頂部に加工したもので他にも類品の出土があった。

図版1右側2個目の貝輪はCトレンチI区一層下部から出土した。めんがい製である。この他にも貝製品の出土があった。

## 鉄 製 品

図版1右上の鉄製釣針は現存の長さ約5cmであるが、頭部が欠失している。本来6cm余あったものであろう。断面は台形で、先端はとがっている。弥生時代の釣針の出土例は多くなく、かつ骨製または角製で、鹿児島県では高橋貝塚にイノシシの牙でつくったものが出土している。



鉄製のものはきわめて少なく、九州では長崎県原ノ述と大分県下城遺跡にその例があり、他には神奈川県毘沙門B洞穴に出土例があるだけで、きわめて稀といえる。

## 5 むすび

上能野貝塚は狭い低湿地と、広い海に面した立地条件としては一応ととのった弥生時代の貝塚である。しかも貝塚の周辺は同一時期のものと思われる埋葬遺跡地が隣接して設けられている。

一般にはこの時期になると農耕生産によって生活が維持されるのが普通であるが、本貝塚の状況を見ると狩猟・漁撈が可成りの比重をもって行なわれていたものと思われ、石斧などの残存することからみても、その生産方法にも縄文時代以来の様相が一部残っていたものと思われる。しかも釣針に鉄を用いていることは、他地域に出土例が少なく、移入品とは思われないから、鉄材の加工技術がかなり進んでいて現地で生産されたものと思われる。

埋葬には広田遺跡などにみられる貝符の副葬の習慣が種子島の全域に行なわれていたようで本遺跡出土の貝符も同様な葬制の存在を示すものであろう。このような葬制は南島一体に行なわれたものと思われる。ただし上能野の埋葬は東岸の鳥ノ峯のような覆石墓のように礫で遺体を被覆するような葬法ではなかったようである。

本遺跡出土の土器はきわめて特色のあるもので、土器の文化が特殊的であるように、本島の弥生後期の社会構造も特色をもったものであったろう。これは種子島の占める位置と風土が大きな原因であるといえる。

了

## 註

- (1) 瀬下安義氏の談
- (2) 瀬下安義氏外よりの聞きとりによる。
- (3) 盛園尚孝 中種子町郷土誌 215頁
- (4) 同 (3) 215頁
- (5) 同 (3) 216頁

## 図版 1



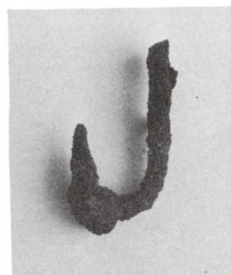
上能野貝塚全景



B トレンチ発掘状況



A トレンチ貝層



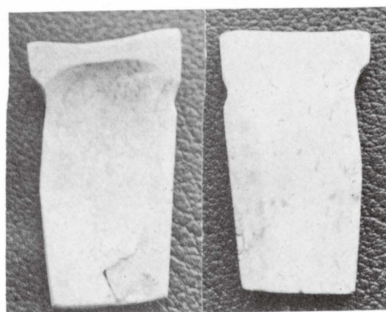
B トレンチ出鉄製釣針



C トレンチ出土貝輪

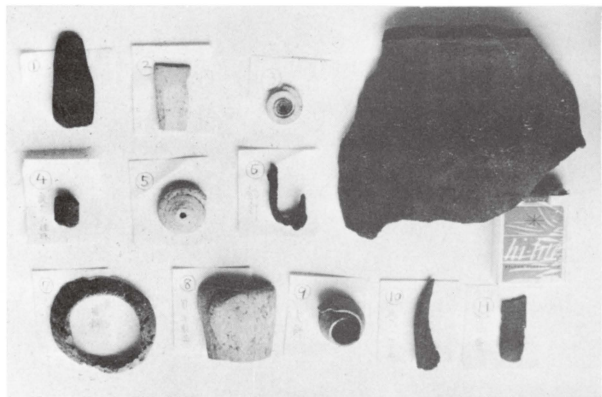


上能野貝塚出土貝輪



B トレンチ出土貝符

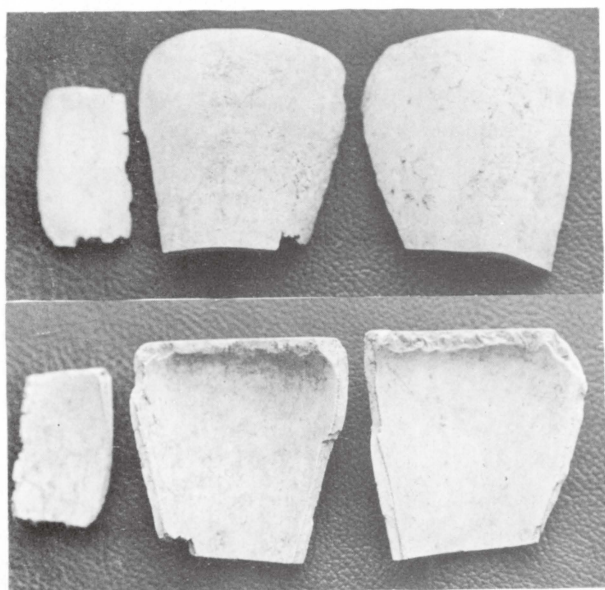
## 図版 2



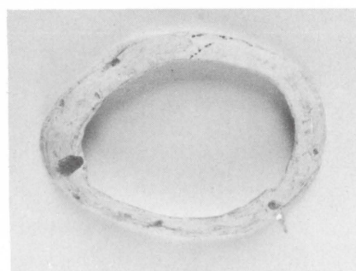
上能野貝塚出土遺物



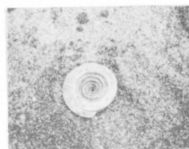
上能野貝塚出土甕形土器



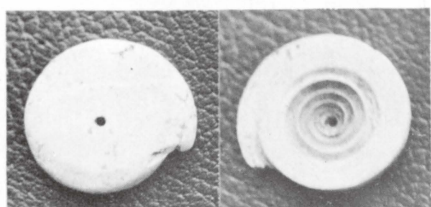
B トレンチ出土貝符未完成品



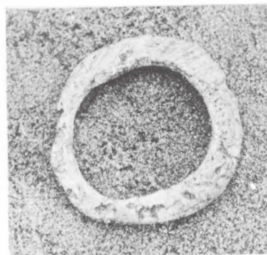
伊関沖ヶ浜 出土貝輪



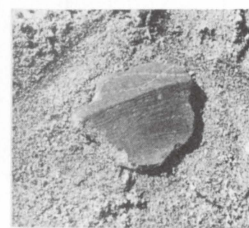
貝製垂飾出土状況



B トレンチ出土貝製垂飾



貝輪出土状況



A トレンチ出土状況